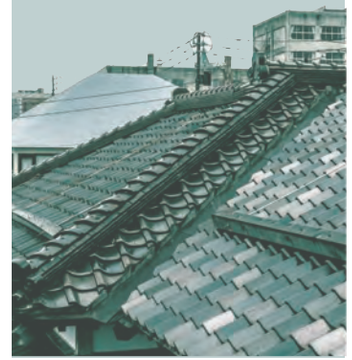
【ひと・まち・坂の記憶】――●第5話

はこだてたてものがたり

山内一男／NPO法人はこだて街なかプロジェクト



人をつなぐ建物／ミートハウス別館・旧西浜旅館（函館市元町）

函館市弁天町の函館港西埠頭あたりは、かつて西浜岸壁と呼ばれ、明治の豪商杉浦嘉七が完成させた埋め立て地である。明治から昭和にかけて露領・北洋漁業の出漁基地として栄えたこの一角に、浅葱（あさぎ）色の外壁が印象的な上下和洋折衷様式の建物がある。

いま「ミートハウス別館」と呼ばれるこの建物の来歴を正確に知るのは難しい。建築は１９０７（明治40）年。戦前は鉄工所だったとも、イカ漁の番屋だったとも言われるが定かではない。確認できる公的な記録は、シリーズ第１話「小森家住宅店舗」の小森明七が所有していたという戦後のものまで飛ぶ。

小森は建物を改造して「西浜旅館」の名で旅館を営んだ。それ以降、この建物は「人と人をつなぐ場」であり続けた。

ライダーたちの熱気

１階和風、２階洋風の木造２階建てだが西側の壁だけは木骨レンガ造。たび重なる大火の経験から造られたであろう防火壁がある。海の見える２階北側に縦長の上下引き違い窓が五つ。１階玄関を入るとすぐに土間とホール。そこに階段がある。旅館時代は１階の洋室と和室２室を家族が使い、２階の和室３室が客室だったらしい。戦後、１９５２年に再開された北洋漁業盛んなりしころは、漁船員の威勢のいい声が響き、出港を祝う宴が開かれたのだろう。

西浜旅館は１９７０年前後まで大いに繁盛したが、２００カイリ漁業規制を受けて北洋漁業が終焉を迎えた後の90年、小森明七が亡くなって売りに出された。隣で民宿「ミートハウス」を経営する坂下清一が新しい所有者となった。

「ミート」は英語で「出会い」。オートバイで広大な北海道を駆けるライダーのための宿だ。坂下は弁天町で青果店を営む傍ら、近くの古民家「旧野口梅吉商店」でライダーハウスを開いていたが、旧西浜旅館隣の建物を取得して「ミートハウス」を始め、旧西浜旅館も購入して「ミートハウス別館」とした。

若者が車やオートバイに夢中になった時代だ。最盛期は日に１００人以上が泊まり、雑魚寝して、酒を酌み交わして深く熱く交わり、港まつりの神輿大会に出たり、まちおこしコンサートを手伝ったり。当時は１泊９５０円、２泊目からは５００円（現在は１泊１３００円、２泊目から８００円）と格安だった。この宿から若いエネルギーが街にほとばしった。

「別館」は２００３年、テレビドラマのロケに使われ、居酒屋を擬して１階ホールにカウンターテーブルと厨房が据えられた。それはロケ終了後も残され、坂下夫人が10年にわたり居酒屋を営んだ。レトロな構えの引き戸を開ければすぐにホールとカウンター。ふらりと立ち寄りたくなる店だったろう。

縦長窓が海を向くミートハウス別館。前に立つのは所有者の坂下清一（右）と、ここに住む家具職人牛嶋堅人

シェアハウスとして

そんな「別館」も、人口減少などで居酒屋が閉まると使われなくなった。新たな歴史が書き込まれたのは２０２０年。前述の「旧野口梅吉商店」をシェアハウスとして借りていた大学生や若い社会人が、散歩中に「別館」に惹きつけられ、「同じように使わせてほしい」と坂下に申し出たのだ。

坂下は快諾し、若者たちは自ら汗をかき建物を修繕したが、冬の寒さは耐えがたく、水道凍結もあって春から秋までの「集いの場」となった。若者たちが建物につけた名は「みなも荘」。水面に石を投げいれると広がる波紋のように、集う彼らの活動が輪のように広がる場所に、と。

短期で寝泊りしつつ、若者たちは絵を描き、写真を飾る棚を据え、唄をつくってライブを開いた。陶芸などのイベントを開けば、立ち寄る人が多くいた。「玄関で靴をはいたまま腰掛けて話せる。２階にも声が通る。ここは人と出会える場所。現代の建物だったらこうはいかない」。北海道教育大学函館校の学生、吉井さつきは語る。

吉井らの「みなも荘プロジェクト」は２０２２年で区切りを迎えたが、市内の家具職人、鳥倉真史が23年からこの建物を借り受け、道南産の杉を使って家具職人や若者たちが住めるよう改修を始めている。「人をつなぐ」建物をめぐる物語は、まだ終わらない。（敬称略）

DATA

建築年度：１９０７（明治40）年
構造：木造２階建て
延べ面積：74・38㎡
様式：上下和洋折衷様式、寄棟瓦ぶき屋根、下見板張り外壁

写真／FOLPHOTO 水本健人

※「はこだて街なかプロジェクト」のホームページに、この連載のサイドストーリーを掲載しています。